48 先人達の偉業を後世へ　悲願の愛知用水が潤す いちじく産地

【愛知県・常滑（とこなめ）市ほか】

○ 愛知用水事業は知多半島の農業生産を飛躍的に向上させ、野菜・果実・花き等バランスのとれた産地が形成。
○ 大規模な用水事業に加え、生産基盤と生活基盤の一体的な整備を通じ、多様な産業による経済成長が実現。
○ 温暖で大都市に近い立地環境の下、青年就農給付金等の支援も受けた、県内外からの若者の新規就農が促進。

取 組 前

恒常的な水不足

- 丘陵地で降雨もすぐに海に流れてしまうため、「知多の豊年米食わず（知多半島が豊年の年は、他の地域は水害で米ができない）」と言われるほど、恒常的に水が不足
- 農業も天水に頼るしかなく、１万超もの皿池から人力でほ場へ配水

皿池と呼ばれる小規模なため池

皿池の水を用水に送る

人力による畑へのかん水

取組内容

農業用水の安定的な確保

愛知用水事業（S32 ～ 36）　[公団営]

- 牧尾ダム
- 兼山取水口
- 幹線水路　112km
  支線水路 1,012km
- 東郷調整池

プロジェクト X

建設中の牧尾ダム →

生産基盤と生活基盤の一体的な整備

農村基盤総合整備パイロット事業
（S48 ～ H7 ）[県営]
- 区画整理、用排水路の整備、農道整備、農村公園緑地整備　等

広域営農団地農道整備事業
（S63 ～ H19）[県営]
等

施設機能の回復・拡充

愛知用水二期事業（S56 ～ H18）
[機構営]
- 幹線水路等の更新
- 支線水路のパイプライン化
- 水管理施設の整備 等

改築された幹線水路と無動力の自動水位調整ゲート

取 組 後

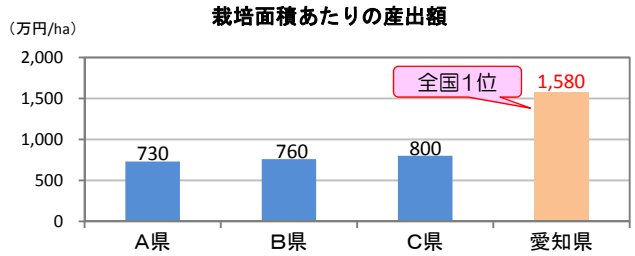
基盤整備を通じたいちじく生産の展開

ＪＡあいち知多 いちじく部会

【生産者数】87名
【営農規模】露地栽培：24.4ha
　　施設栽培：　2.5ha
※平成28年度

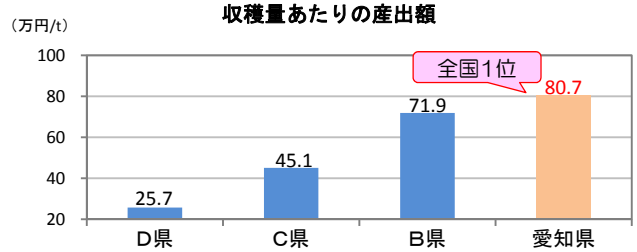
【土地生産性の向上】

○ かんがい施設の整備や区画整理により土地生産性が向上



【品質の向上】

○ 基盤整備や雨よけ栽培などの取組により品質が向上



【新規就農の拡大】

○ いちじく栽培を行う10名の新規就農者を確保（H23～28）

◆ 100km 以上離れた木曽川の水を知多半島へ

篤農家の久野氏、農林学校教師だった濱島氏らの熱意が政府を動かし、事業の着手が決定。世界銀行からの融資や技術指導もあり、わずか４年で大工事が完成し、悲願だった用水供給が実現しました。

◆ いちじく産地はどのようにして ・・・？

基盤整備に伴い畑地農業が進展し、いちじくの栽培も始まりました。収益性が高く、比較的栽培が容易なことから生産が拡大し、知多半島全域で出荷組織が発足するなど販売体制も整備されました。

きっかけ

大干ばつに見舞われ小規模なため池に依存していた農業は壊滅的な被害を受ける

Step 1　（S32～36）

愛知用水事業

○ 愛知用水概要図(1.8m×3.6m)を用いた説明会は延べ70回に及び、知多半島の１市25町村全てが参加する期成会が設立

○ 世銀の融資の下、愛知用水公社(当時)が設立

Step 2　（S48～H19）

農村の総合的整備

○ 長期的観点に立った土地利用計画に基づき、農村の生産基盤と生活基盤を一体的に整備

○ 農産物の集出荷の合理化や消費地へのｱｸｾｽ改善を図る基幹農道を整備

Step 3　（S56～H18）

愛知用水二期事業

○ 幹線水路である上工水との共用区間は、断水することなく点検等できるよう水路を二連化

○ 支線水路では水管理の高度化を図るため、ﾊﾟｲﾌﾟﾗｲﾝ化や水管理ｼｽﾃﾑの導入等を推進

「愛知用水概要図」
1948年（昭和23年）
濱島辰雄氏作成６・６

◆ 愛知県のいちじく生産量は日本一！

その中でも知多のいちじくは、温暖な気候の下、太陽の光をしっかり浴びた大玉果実を生産しているのが特徴です。

<出荷時期>
露　地：７月下旬～11月上旬
ハウス：４月～８月上旬

Step 4　（H19～）

品質の確保

○ 腐敗やカビの発生を防ぐため、雨よけハウス、傘掛け栽培等を導入

○ 液肥混入機を導入し、かん水同時施肥を実施

○ 集荷した果実を予冷して出荷

Step 5　（H23～）

新規就農者の確保･育成

○ ＪＡ･市･県が連携して就農希望者の支援(就農相談や就農後の経営支援等)を実施

○ ＪＡが新規就農者に対して農地を斡旋

青年就農給付金を活用

今後の展望

Tip

青年就農給付金

<準備型>

農業大学校や先進農家等で研修を受ける就農者※に、最長2年間、 年間150万円を給付します。

<経営開始型>

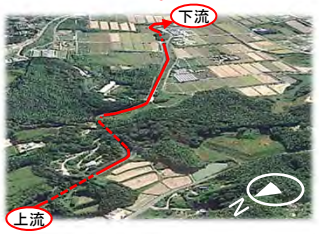
新規就農者※に、農業を始めてから経営が安定するまで最長5年間、年間150万円を給付します。

※注： それぞれ原則45歳未満である等の要件があります

将来に向けて

☑ 70歳以上の栽培農家が約３割を占める中、いちじく産地の維持・発展を図るため、新規就農支援の充実化を通じた就農希望者の確保を推進

☑ いちじくパッキングセンターの活用を促進し、出荷作業の省力化による経営規模の拡大や更なる品質の向上を推進



呑田開水路近隣農地の昔と今
（常滑市樽水付近）